

【一】 次の各問いに答えなさい。

問一 次の——線部の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

- ① 口実を設けて断る。
- ② 悪人を裁く。
- ③ のんびりした口調。
- ④ 飛行機を操縦する。
- ⑤ 計画案には賛否両論がある。

問二 次の①～⑤の熟語の構成の説明として適当なものをそれぞれ後から選び、記号で答えなさい。

- ① 問答
- ② 消灯
- ③ 美談
- ④ 人造
- ⑤ 尊敬

ア 同じような意味を持つ漢字を組み合わせている。

イ 反対の意味を持つ漢字を組み合わせている。

ウ 上の字が下の字の意味をくわしく説明している。

エ 下の字から上の字に返って読むと意味がよくわかる。

オ 主語と述語の関係にある。

問三 次の①～⑤の文で使われている敬語の説明として適当なものをそれぞれ後から選び、記号で答えなさい。

- ① どうぞ好きな料理をいただきます。
- ② あいにく父は今日はいらっしゃいません。
- ③ 放課後、母が学校にうかがいます。
- ④ 後日改めて、私の絵を拝見してください。
- ⑤ あなたがおっしゃることはよくわかります。

ア 尊敬語を使うべきところで、正しく尊敬語が用いられている。

イ 尊敬語を使うべきところで、誤って謙讓語が用いられている。

ウ 謙讓語を使うべきところで、正しく謙讓語が用いられている。

エ 謙讓語を使うべきところで、誤って尊敬語が用いられている。

問四 次の①～⑤の（ ）の中に適当な漢字一字を入れて、ことわざを完成させなさい。

- ① 三つ子の魂たまし（ ）（ ）まで
- ② 背かに（ ）は替かえられぬ
- ③ 飛んで（ ）に入る夏の虫
- ④ 寝耳ねみに（ ）（ ）
- ⑤ 笑う門かどには（ ）（ ）来たる

【二】筆者は、三十年間のサラリーマン生活を送ったのち、フィリピンのセブ島沖に浮かぶ周囲二キロの小島、カオハガン島を購入し、日本から移住した。次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

思ってもみななかった外国の島、しかも人の住んでいる土地を手に入れてしまった。もともと私は「土地を私有する」ということに何か割り切れない感情をもっている人間だ。はたして、私はカオハガン島で何をしているのだろうか。何か「良い」ことをしたのだろうか。私がカオハガン島の※オーナーになったことが、はたして島の人たちにとってよかったことなのか。このことはいつも私の頭にあつて離れない。

島民との関係はともうまくいつている。この三年の間、住民のことを（心）意考え、住民のためになればいろいろな行動してきた。この点、ためらいも悔いもない。

この数年フィリピンにも開発の波が押し寄せて来ている。※マクタンの海岸にも大きなホテルが立ち並ぶようになった。土地の値段は急速に上がり、今では、島を買うなどということは夢のような話になってしまった。

私があの時カオハガン島を買っていなかったなら、島は必ず業者の手にわたり、そしてやがて大きな開発が始まっていただろう。買われた瞬間に、住民たちは島を立ち退かなければならなかっただろう。これは、ほぼ間違いないことだ。つまりカオハガンという村は消滅していたに違いないのだ。①このことを現時点でセイカクに理解している島民は、おそらく村長のアマドのほか数人しかない。

私たちがこの島に住み始めたこと自体が、異文化の流入による文化汚染の始まりだという言い方はできる。しかしそのことと関係なく、島をオートズれる観光客の数が増えている。私たちの出すゴミ、観光客の出すゴミはそれ以前と比べて数倍に増えたと思う。cデントウ的な漁業に頼っていた島の現金d シュウニユウが観光客にお土産を売ることに変わってきた。素朴な島の人たちの性格も少しずつだが変わってきているようにも思える。

しかし、他の世界から隔絶した場所などもう世界中どこへ行ってもない。ましてセブ島から比較的近いカオハガン島には、黙っ

ていても観光客がどんどんと押し寄せる。②他の文化の侵入を押しさえつけるわけにはいかない。また、それを止める権利は誰にもない。私たちがするべきことは、新しい文化が入ってきた時に、ただ無力にそれに飲み込まれるのではなく、自分たちで考え、自分たちで選択することを島民たちに教え、その力をつけさせることだと思う。

私は第二次大戦後の東京で少年時代を送った。戦争が終わり進駐してきた米兵の運んできたアメリカ文化がキラキラと輝きまぶしかったものだ。今、カオハガンの島の人たちには、きつと我々の「北」の文化がまぶしく映っていることだろう。その時、まだ小さかった私には、自分たちの生活、自分たちの文化がいかに貧しく思えたことか。カオハガンの人たちは、ただただ島の生活は貧しいものと思っている。そして「北」のような生活をしたいと憧れている。そう思うのはごく自然なことだ。

「わたし、貧乏でかわいそう」島の人たちは口ぐせのように言う。マクタンに家を持ち、月曜から金曜までを島で過ごししている小学校の先生は、毎日島の人たちが潮の引いた海に出て、自分たちがその日に食べる魚や貝を捕りに行くのを「かわいそうで、見たいられない」と言う。

しかし、③私にはそうは思えないのだ。たしかに彼らの持っている「もの」は少ない。日本の人のおそらく、数百分の一も持っていないだろう。小さな家。数着の破れかかった衣服、数枚の食器、毛布、ゴザ、枕などの寝具、バケツ、一ちようの鉋、ランプ。そして、数軒の家がラジオ、ノコギリ、のみなどの大工道具、小さな船を持っている。彼らの財産はそんなものだ。それを、こまめにシユウリし、きれいに手入れして生活している。持ち物だけを比較すれば、まさにこれ以上の貧乏はない。

しかし彼らはゆとりをもって生活している。生活自体がシンプルだから、あくせく働くこともないし、あせることもない。島のみんなが知り合いだし、どんな人も島の社会で役割をもっている。差別なども存在しない。私の目には、カオハガンの人たちはいつもハッピーな生活を送っているように映るのだ。事実彼らの目はいつもやさしく輝いている。

昔からあるジョークがある。太平洋の小島に金持ちがヨットでやって来た。島民が「お金があつていいなあ」と言うと、金持ちは「冗談じゃない。私は一生懸命働いて、お金を貯め、やっと休暇をとって南の島にやってきたのだ。あんたたちは初めからここに住んでいるじゃないか」。

(図1)

$$\text{幸福} = \frac{\text{財産}}{\text{欲望}}$$

人間の「幸福」の※尺度は、次の方程式で測れるという。(図1)

人は幸せをつかもうとして金を貯め、物を、財産を増やそうとする。しかし、財産が貯まりはじめると、それにつれて欲望もそれ以上に膨れてくる。そして、さらにその欲望を満たすために努力して金を稼ぐ。しかし、また欲望が膨れ上がる。いつまでたつても心の幸せはつかめない。この考えはとも面白く思う。考えてみると、たしかに、我々が身体ごとどつぷりと浸かり、当然のことと思ってきた「幸せ」とは、分子(財産)を大きくする幸せだったのだ。また、皆がそう思わないと、近代資本主義経済はなりたない。物を大量に作り、大勢の人がそれを買い、消費しないと近代資本主義は成立しないのだ。もともと人間の欲望には限りがない。それに周りが、モデルチェンジを繰り返して「消費は美德だ」と煽りたてる。皆が脇目もふらず働き、金を貯め、物を買う。

最近になって、物の溢れる生活の中で、大勢の普通の人が「ほんとうに我々は幸せなんだろうか」と感じるようになった。そして同時に、この大量の消費を美德とする文明自体が地球環境を悪化させるということが分かってきた。そして、それが、人類を滅亡に導くということにもなりかねないのだ。

ではどうすればいいのか。分子(財産)を大きくしようとするのではなく、分母(欲望)を小さくすることだ。分母を小さくすれば、その結果心の幸せは大きくなる。

④このことは、今の日本社会に住む人々にはとても難しいことだ。しかし、同時に、とても大切なことなのだ。周りに踊らされることなく、自分の本当に欲しいものだけを所有し自分らしい生活をする。欲望を小さくするところに幸せは存在するのだ。

そしてまさにこれはカオハガン島の人たちの生活なのだ。彼らは購買意欲を常に刺激され、望めば多種大量の物が手に入る環境がない。その中で物に対する欲望が強くは芽生えず、心の安定した生活を送っているのだと思う。

これが私がカオハガン島で学んだ一番大きな教訓だ。今「北」の人たちが何かいらだちを覚えてるのはこのことなのだと思う。これが、私たちが※「南」から学ぶことができる大きな教訓なのだと思う。そして⑤この考え方は、今後も地球環境をバランスがとれたものとして維持するためにも最も大切なことなのだ。

このことに気がついただけでも、カオハガンで生活してほんとうによかったと思っっている。そしてこれができるだけ多くの「北」の人たちに身体で感じてもらいたいと思っっているのだ。これからは、「北」の文化というものがいやおうなしにこの島の生活に押し寄せ、入り込んでくる。その時に島の人たちがしつかりとした対処ができるように、私に何かができれば、私が島に来たことが有意義になり、島への恩返しになるのだと思っっている。

(さき崎山 克彦かつひこ『何もなくて豊かな島』より)

※オーナー……所有者

※マクタン……カオハガン島の北にある島

※進駐……軍隊が他国の領土に進軍し、とどまっっていること

※「北」……経済的に恵めぐまれている国や地域のこと。主に北半球に属する先進工業諸国を指す

※尺度……物事を測るときの基準

※「南」……「北」と比べたときに経済的に恵まれていない国や地域のこと。主に南半球に属する発展途上国を指す

問六 ——線部③ 「私にはそうは思えないのだ」とありますが、これはどうしてですか。その理由としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 時間に追われるかのように忙しく働く様子が島民たちに見られないから

イ 自給自足を中心とした簡素な生活を送りながらも島民が目を輝かせているから

ウ 人にやさしい島の文化のなかで、誰もが差別することなく幸せに暮らしているから

エ 「もの」を大切にする精神が息づき、生活必需品は村の共有財産だと考えているから

オ 島の住人全員がお互いに顔見知りという間柄であり、誰もが役割を持っているから

問七 ——線部④ 「このことは、今の日本社会に住む人々にはとても難しいことだ」とありますが、これは「今の日本社会に住む人々」がどのような生活環境にいるからですか。本文中から三十字以内でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問八 ——線部⑤ 「この考え方」の内容をわかりやすく表している部分を本文中から二十字以内でぬき出しなさい。

問九 本文の内容に合うものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「もの」があふれる社会に暮らしていた筆者が、カオハガン島の「もの」がない生活に新鮮な感動を覚え、自分も「もの」を持たない生活を実践し、次第に島民に受け入れられるようになった。

イ カオハガン島に見られるように、「もの」を多くは持たないシンプルな生活が、人にやさしく、差別のない社会を実現し、ひいては地球環境の維持にも貢献しうると筆者は考えている。

ウ 「もの」にたよらない独自の文化を持つカオハガン島を手に入れた筆者は、いずれ受け入れざるをえない資本主義を想定し、あらかじめ大量生産、大量消費の仕組みを築いておこうと努力している。

エ カオハガン島に住む人々が「もの」に対してまったく欲がなく、何も持たないことに誇りを持って生活をしている姿を目の当たりにした筆者は、「もの」にこだわる資本主義に対して怒りをおぼえている。

オ 「もの」をできるだけ持たないで生活しているカオハガン島の人々も、開発の波が押し寄せてくるなかで次第に「もの」に心を奪われ、お金もうけのことしか考えられなくなってきたことを筆者は嘆いている。

カ 「もの」をあまり持たない生活をするカオハガン島に今後多くの人や「もの」が流入してきたとき、島民たちが心を奪われないよう、自分で考え、それらを受け止められる人づくりを筆者は目指している。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

前の席からメモが回ってきて、チヅルはくすつと笑ってしまった。こんなうまいマンガを描くのは、マンガが上手で、女子がお絵描きノートをもっていつて、描いて描いてとせがむ四年一組のスターのひとり、花村マユミに違いなかった。チヅルはマユミのほうをふり返って、笑いながら手をふった。そのとたん、

「そこ！ なにやってる」

するどい声が飛んできて、ついでにチョークも飛んできた。

チヅルはとっさにメモを後ろ手に隠したのだったが、どうも、それがマズかったらしい。三原センセーは教壇をかけおりてきて、無言で、チヅルの手からメモをもぎとった。メモにはぶんぶん怒った三原センセーの似顔絵が描かれている。メモを見るなり、三原センセーの顔はみるみる真っ赤になっていった。小さい体ぜんぶが、

A

震えだすようなのだった。

「植野。おまえが描いたのか」

チヅルは真っ白の頭の中で、ずいぶん前に読んだ偉人伝かなにかで、友だちをかばって叱られた主人公の話の思いだし、ここで花村マユミをかばったら、カッコいいかもしれないアとふと思いつながら、ぶんぶんと首をふった。

「あたしじゃないです」

「だれが描いたんだ」

「あのおう……わかりません」

「だったら、おまえが描いたことになるんだぞ」

と三原センセーは容赦なくいい、どうしてそうなるのか、チヅルにはぜんぜんわからなかったが、ともかく、友だちをかばうのはカッコいいかもしれない、みんなもメモは読んでるんだしと、^①頭の中ですばやく計算しながら、

「それでもいいです」

ぼそぼそという、三原センサーはくしゃつと顔をしかめて、

「ふてぶてしい子だ。バカにしやがって」

吐きすてるようにいい、そんなことは母親にもいわれたことがなかったチヅルは、腰が抜けるほど驚いてしまった。

けれど、^②チヅルがもつとびっくりしたのは、その授業がおわり、やれやれと思いつながら花村マユミのところについて、

「メモとられるとは思わなかったね。でも、ばれなくて、よかったねー」

と笑いながらいうと、マユミがそっぽを向きながら、

「しらないよ、あたし。植野さん、ばかだね。メモとられて。ちゃんと隠せばよかったのに」

と小声でいい、マユミの机のまわりに集まっていた女子のグループがみんな、そうだそうだというようにうなずいて、やつぱりそっぽを向いたことだった。

気のせいかな、その日一日、教室のだけれもがよそよそしい感じで、チヅルは帰る道々、（イジンの伝記って、うそばっかだ。だれも、ほめてくれない。かばってソンした）と、Bしてしまった。

このときのメモ事件はのちまで崇^たって、チヅルはソンのしどおしだった。

授業のときも、センサーが力まかせに字を書くので、たてつづけにチョークが折れてしまい、みんながくすくす笑っていると、

「だれだ、笑ってるのは！ また、植野か！」

三原センサーに、名指しで叱られてしまった。

チヅルはちゃんとマジメにノートをとっていたので、突然、名前をよばれてびっくりして顔をあげると、その、Cした顔がおかしかったのか、みんなはどつと笑いだして、そのときばかりは三原センサーも叱らずに、それどころか一緒に笑いだした。

チヅルはわけがわからず、ぼかんとしていたけれど、^③胸の底がやけるように熱くなってきた。なにか、どろどろした泥水をむりやり飲まれたような、重いものが胸につまったような感じがしたのだった。

そのときの胸が重たい感じは、今もずっと残っている。

学校について、ランドセルから教科書を出しながら、（角田センサー、はやく退院しないかなあ。三原センサーは、いつまでいるんだろう）——「ここ最近、学校にくるたびに思うことをまたも考えて、タメ息をついた。

その日は、一時限目から漢字の書きとりテストがあり、チヅルはわからない漢字をいくつか残して、さっさと裏を返してしまっただ。いつもだったら、時間たっぷりまで思いだそうとするのだけれど、三原センサーのテストだから、どうでもいいやと捨てばちな気分だった。（下級生のころはよかったな。中学生でもいいな。今の四年生から、ぱつと六年生くらいにならないかな。もしダメだったら、転校でもいいや）——そんなことを考えて、Dしていたので、となりの列の林ヨシユに肘をつつかれて、「ねえ、習ってない漢字がいくつもあるよね」といわれたときも、すぐにはわけがわからなかった。

気がつくとも、教室のあちこちで、みんなもざわざわと囁きあっていた。

そういえば、書けない漢字がいくつもあつたつくと、やっぱりボーツとしていると、

「黙って、テストをしろ。なにを騒いでるんだ」

イスに座って、本を読んでいた三原センサーが立ちあがり、④まるで磁石にひきよせられるように、チヅルのほうを見た。（やられる！）

とチヅルがハツとして肩をすぼめるのと、

「植野、また、おまえが私語してるのか」

と三原センサーがいうのは同じくらいだった。

ざわざわしていた教室はすぐにシンとなり、隣近所と囁きあっていたみんなはぱつとうつぶむいて、テストの続きをはじめた。さらさらと鉛筆を走らせる音だけが、ひどくはつきりと響いてきて、チヅルはふいに吐きそうになった。鉛筆の音はどんどん大きくなっていて、その音に押しつぶされそうだった。チヅルは歯をくいしばって、うつむいていた。

やがてテストがおわって、センサーが黒板に正解を書きはじめて、自己採点がはじまったとき、チヅルは筆箱から、青鉛筆を出

して採点した。点数は85点だった。テストの上のほうに青鉛筆で8点と書き、赤鉛筆を出して5点をわざと消して、^⑤でかかど0点と書きなおした。

「植野、これはどうしたんだ」

出席番号順に提出することになって、チヅルがテストを返しにゆくと、三原センサーもさすがに驚いたのか、顔をあげた。

「私語してたから、0点です」

チヅルは言葉につまりそうになりながら、ようやくそれだけをいって、急いで席に^{もど}戻った。

イスに座ったとたん、思わず^{なみだ}涙が出てきそうになったので、あわてて机につっふした。

みぞおちのあたりがジクジクと痛んできて、ほんとに吐きそうなほど気分が悪かった。その日は一日じゅう、みぞおちが痛くて、授業どころではなかった。

掃除^{そじ}当番だったのだけれど、とても掃除どころではなく、早く家に帰りたい一心で教室を出かかると、

「植野さん、当番……」

と呼びとめられて、ふり返ると、花村マユミだった。

^⑥チヅルは力いっぱい、目に力をこめてマユミをにらみつけてやった。マユミがみるみる泣きそうな顔になるのを見届けてから、チヅルはものもいわずに、ゆっくりと教室を出た。

その夜の夕ご飯は、おかずがチヅルの大好きなゲソ^あ揚げだったけれど、チヅルはほとんど食べられずに残してしまった。

「おかあさん、チヅル、転校してもいいかな」

ふと気がつくと、チヅルはそういつていた。いいながら、自分でもびっくりしていた。

けれど、ほんとうにもう、うるさい教室を静かにさせるために、いつもいつも自分ばかりが注意されるのがイヤだったし、三原センサーがおっかないばかりに、しらんぷりしているクラスのみんなもズルいと思うのだった。

きっと、おかあさんは、なにバカいってんのさと怒りだすに違いないと思って、チヅルはみぞおちのあたりを押さえた。また、ジクジク痛んできたのだ。それでも、

「チヅル、今の学校、いやになった。転校したら、勉強するよ。ちゃんと家の手伝いもするよ。だけど、今の学校はいやだよ」言葉がとまらなくて、せきこみながらいうと、母はフンと鼻をならして、

「いいよ。転校さしたげるよ」

あっさりいった。チヅルはびつくりして、思わず顔をあげた。

イヤミをいってるのかと思ったのだが、母はぜんぜんイヤミな顔をしていなくて、それどころか泣きそうな顔で、

「^⑦学校で、なにかいやなことがあるのかい？ このごろ、調子悪いんだって？ おねえちゃんも心配してるよ。チヅルはお調子者だけど、悪い子じゃないよ。おかあさん、チヅルの味方さ。転校したいんなら、すぐにさしてやるよ」

怒ったように、口をとがらせて早口にいうのだった。

チヅルはぼかんとして、母を見返してしまった。母が、そんなふうにいるとは思ってもみなかったのだった。

「いいよ、そんなの。転校しないよ。おかあさん、せつかちだからさア」

困ってしまった、へらへら笑いながらいううちに、ふと、今度は胸ではなく目のところが熱くなってきた。^⑧じわじわとくすぐつたいほど、目が熱くなってくるのだった。

「目がかゆくなった」

チヅルはあわてて目をこすりながら、へへへと笑った。

「カルピス飲みな。残したゲソ揚げ、明日の朝、食べてもいいよ」

母もやっぱりテレクさそうに笑いながら、めったに聞かない優しい声でいった。

うす味のカルピスはほんのり甘^{あま}ずっぱくて、胸の奥^{おく}がすうっとするようだった。

問一 ——線部①「頭の中ですばやく計算しながら」とありますが、「チヅル」は頭の中でどのようなことを計算したのですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 友だちをかばうと、センサーに自分だけが怒られて、立場が悪くなってしまうだろうということ
- イ センサーに怒られても、友だちをかばったことなら母にほめてもらえるだろうということ
- ウ 本当のことを言うよりも友だちをかばうほうが、みんなから認めてもらえるだろうということ
- エ うそをつくよりも本当のことを言ったほうが、センサーに気に入ってもらえるだろうということ
- オ 本当のことを言ったとしても、どうせセンサーには認めてもらえないだろうということ

問二

A

D

 に当てはまる語をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。(ただし、一つの記号は一度しか使ってはけません)

- ア きよとんと
- イ へらへらと
- ウ ぼんやりと
- エ あっさりと
- オ ぶるぶると
- カ しよんぼりと

問三 ——線部②「チヅルがもつとびっくりしたのは」とありますが、チヅルはどういうことに「もつとびっくりした」のですか。説明しなさい。

問四 —— 線部③「胸の底がやけるように熱くなってきた」とありますが、このときのチヅルの気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大好きな角田センサーに叱られるなら納得できるが、自分のことを何もわかってくれない三原センサーに怒られるのはとても我慢できないと思っている。

イ やつてもいけないことで叱られた上に、三原センサーまでがみんなといっしょになって自分を笑ったことにショックを受けて、悲しく悔しい思いをしている。

ウ 新しく来てくれたばかりの三原センサーに笑われるのは我慢できるが、クラスのみんなに笑われるのは仲間はずれにされたようでつらいと感じている。

エ 自分は真面目にノートをとっていただけで、笑ってなどいないのに、三原センサーに突然叱られたので何が起こったかわからず気が動転している。

オ 三原センサーのことを笑っていたのがばれてしまって、自分だけがみんなの前で名指しで叱られてしまったことを、情けなく恥ずかしいと思っている。

問五 ——線部④について「三原センサー」が「まるで磁石にひきよせられるように、チヅルのほうを見た」のはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が本を読んでいる間に、チヅルを中心にまたクラスが騒さわがしくなっていることに気づいたから
- イ チヅルがさつさとテスト用紙を裏返してぼんやりしているのに気づいて、注意しようと考えたから
- ウ みんなが騒がしくなったのは、今回もまたチヅルが原因だろうという気持ちがあったから
- エ まだ習っていない漢字をテストに出してしまったので、何とかごまかそうと思ったから
- オ 生徒の漢字の力を伸ばすために作ったテストなのに、みんなが集中して受けようとしなから

問六 ——線部⑤「でかでかと0点と書きなおした」とありますが、このときのチヅルの気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分だけが私語をしていたかのように三原センサーに言われたことに対して反発し、抗議こうぎしようとする気持ち
- イ いつも自分ばかり怒る三原センサーに腹が立っていたので、0点と書くことで困らせてやろうという気持ち
- ウ 三原センサーによく思われていないことが悲しくて、反省していることをわかってもらおうという気持ち
- エ 三原センサーは自分をわかってきてくれないので、良い点をとっても自分を信じてくれないだろうという気持ち
- オ 習っていない漢字がテストに出たことで騒がしくなったことを三原センサーにわかってほしいという気持ち

問七 ——線部⑥ 「チヅルは力いっぱい、目に力をこめてマユミをにらみつけてやった」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問八 ——線部⑦ 「学校で、なにかいやなことがあるのかい？」とありますが、チヅルは学校のどんなところがいやだと思っているのですか。それがわかる一文を本文中からぬき出し、最初の五字を答えなさい。

問九 ——線部⑧ 「じわじわとくすぐったいほど、目が熱くなってくるのだった」とありますが、それはなぜですか。二十字以内で答えなさい。

問十 本文の特徴ちゆうとして、適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 擬声語や擬態語を多用することで、登場人物の心情や様子をいきいきと表現している。
- イ 文章の中に効果的に会話文を取り入れることによって、テンポよく物語を進めている。
- ウ カタカナ書きの多用が、文章に軽さを出し、子どもらしい感覚をうまく伝える働きをしている。
- エ 学校や家庭での出来事、そこに登場する人物の性格などを、一貫してチヅルの視点から描いている。

才 擬人法や体言止めを用いることによって、チヅルの周囲の出来事をたんたんとして表現している。

【一】 (二十点)

問一 ① もう けて ② さば く ③ くちよう ④ なつとく ⑤ ひんぷ

問二 ① イ ② エ ③ ウ ④ オ ⑤ ア

問三 ① イ ② エ ③ ウ ④ イ ⑤ ア

問四 ① 百 ② 腹 ③ 火 ④ 水 ⑤ 福

【二】 (四十点)

問一 a 正確 b 訪 れる c 伝統 d 収入 e 修理

問二 誠

問三 「私」がカオハガシ島を買っていなければ、カオハガシ村は消滅してしまつたに違いないといふこと

問四 文化汚染

問五 C

問六 エ

問七 購買意欲を、に入る環境

問八 欲望を小さくするとところに幸せは存在する

問九 イ カ

【三】 (四十点)

問一 ウ

問二 A オ B カ C ア D ウ

問三 かばつたつもりのマユミに感謝されるどころかそつぽを向かれ、マユミのまわりにいた女子のグループにもそつぽを向かれたこと。

問四 イ

問五 ウ

問六 ア

問七 マユミのせいでつらい目にあっているのに、さらに掃除当番のことまで言われたから。

問八 けれど、ほ

問九 母が理解してくれてうれしかったから

問十 オ

【一】次の問いに答えなさい。

問一 次の〰線部が直接かかっている部分はどこですか。文中の――線部ア～エから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① はらはらと　ア　冬　イ　木枯らしに　ウ　木の葉が　エ　まい落ちた。
きみが　ア　どれだけ　イ　泣こうと　それは　ウ　きみの　エ　勝手だ。
- ③ 今年の　ア　マラソン大会では、みんな　イ　負けないくらい　ウ　がんばって　エ　走った。
さすがに　ア　母は　イ　突然の　ウ　電話に　エ　おどろいたようだ。
- ④ さすがに　ア　母は　イ　突然の　ウ　電話に　エ　おどろいたようだ。

問二 次の――線部をそれぞれ漢字に直しなさい。ただし、送りがなの必要なものは、送りがなまで書くこと。

- ① ノーベル賞作家のコウエンを聞く。
- ② 彼はギヤツキヨウにもめげずに、よく学んだ。
- ③ キチヨウ品を金庫に入れる。
- ④ シュシヤ選択をする。
- ⑤ 税金をおさめる。
- ⑥ 高くけわしい山に登る。
- ⑦ 畑をたがやす。

問三 次の言葉の対義語をそれぞれ漢字で書きなさい。

① 水平

② 結果

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

徒弟制度が消えていった理由はさまざまあるだろう。あげればきりがなが、職人を育て上げた徒弟制度とはどんなものであり、
師匠は弟子に何を教えてきたかももう一度考えてみたい。

徒弟制度の目的とは、弟子が師匠の家に住みこんで、同じ現場や仕事場で働き、いっしょに寝泊まりし、修業を積んで一人前の職人として生活できるようにすることであった。何も住みこまなくても、学校で学ぶように仕事のとくに通って技だけを教われればいいじゃないかと思う人もいるだろう。説明もなく、見て覚えろと言うばかりで何年かを過ごすなんてもつたいないし、むだが多いと思うに違いない。もつとわかりやすく、言葉で説明してくればこんなに長い時間をかけなくても覚えられるだろうにと、幾世代もの徒弟たちがそう思いながら苦労を重ねてきた。この言葉は徒弟制度で育った職人たちから何度も聞いた。こうした教え方はすべて古く間違いであったのだろうか。

ここに新聞の切りぬきがある。『技』の記憶は小脳で」と題した記事で、これまでは技の記憶も言葉と同じように大脳でという考えが強かったが、実は小脳に記憶されていることが判明したというものであった。くわしい記憶の部位や試験方法、脳の構造などはわからないが、
X が科学的に立証されたのであった。

技はいくら言葉でいいねいに説明しようとしてもできるものではない。師匠がやっていることを見て学び、体で覚えるものなのである。体が技を記憶するには自分で進んで考え、くり返しやってみるしかないのだ。A、徒弟制度というまどろっこしく、時間のかかる制度が、技の伝授に際し採用されていたのである。そして、かつては弟子として苦勞し一人前になり、現在親方として新しい弟子をかかえる職人たちは皆、次のように言う。「技を教わることも難しかったが、人に教えることもまた難しい」と。

B、大工の師匠が弟子に、「この板を真つ平らにけずっておいてくれ」と言う。竹細工の師匠は弟子に「細く美しい竹ひごをつくっておけ」と言う。しかし、技が身につけていないものには、まず師匠の言う「真つ平ら」や「美しい」の内容が、全く伝わらない。C、それを作る作業を教えるとなればなおさらである。しかし、技を覚えたがっている弟子に技を伝授するのが師

匠である。だから師匠は、「見て覚えろ。技はぬすむものだ」と弟子にくり返すのである。

徒弟制度を学校の先生と生徒のように考えている人がいるが、それは違う。学校の先生は数学、理科、地理などの教育のセン
ン家である。そして、先生が、現実社会から切りはなされた教室という空間で、物事を教えていくのが学校という場である。そこ
でものをいうのは、現実のさまざまなことについて書かれた言葉である。言葉によって表された知識をむだなく習得させることが
学校の役割であり、先生の仕事はこの点に重点が置かれていると言ってよい。ここでは生徒たちが「生きること」そのものを学ぶ
ことは難しい。

しかし、職人の場合は違う。³昔からどの職業も、弟子をとった職人は師であつても先生ではない。その道ではすぐれた職人では
あるが、上手な教育者ではない。どの時代でも、いい師匠の教え方がうまかつたわけではない。だれもが教えることの難しさを知
りながら、なぐつたり、げんこつを与^{あた}えたりして、厳しく弟子に教えてきたのである。すぐれた職人ほど、「技は自分でぬすみ、
覚えるしかないこと」を知っていた。そして、その厳しさの中で弟子たちは、自ら進んでその職業に合った体を作り、その職業に
見合った技を体に覚えさせ、いつでもその仕事のことを考える習慣を身につけるのである。一人前の職人になることは、厳しい
修業を通して、社会の中で自分たちが果たす役割をはつきりと知り、その職業で生きるための厳しい人生観を身につけることであ
る。すなわち自らの生き方そのものを学ぶのだ。これを師は、教室や教科書や言葉ではなく、寝食^{しん}をともし、身をもって、現場
で仕事をしながら教えるのである。こうして長い時間をかけて育つた職人は、他人が持っていないすぐれた技を身につけているこ
とからくる「誇り^{ほこ}」をもって、「いい品物」を市場に送り出していたのである。

こうして育つた職人たちが、現在、大量生産、大量消費の社会情勢の中で厳しい状況^{きんじょう}に置かれており、徒弟制度自体も存亡の
危機に直面している。⁴徒弟制度の中で職人の身に刻みこんだ経験を、ものづくりに際して必要としない時代が来たのである。彼ら^{かれ}
はこれまで、修業の中で身につけた技と勘^かを武器に自然を相手にし、自然が供給する素材と一対一で向かいあっていた。しかし、
今、ものづくりの現場^①においての主役は機械であり、工場から送り出された均一の素材である。ここで、さまざまな判断をするの
は機械であり、人間はその機械を使うだけである。ここでは人間が長い時間をかけて、じっくりと素材の複雑^②な性質を知る必要は

ないのである。機械の仕事は、人間の経験に基づいたものよりも早く、むだがない。工場における大量生産のシステムの現場では、「ふつうの人」が働いている。簡単に操作できる機械をあつかうことができればそれで十分であり、特殊な経験など必要がないのだ。⁵ものづくりの現場から「誇り」が消えていく。職人たちが長年かけて身につけた、特殊な勘、技は^④ここでは単にむだなのである。効率性重視の生産現場においては、職人の特殊な経験を長時間かけて^bジユクセイするといったシステムは、旧時代の古ぼけた遺産としか受け止められなくなってきたのである。このような状況の中で、まだかつての経験が技を生み出すやり方が残っているとは言え、それは^⑤ごくわずかになってきた。職人が消えた社会、手仕事がなくなった時代、経験が機能しなくなった社会は、今後どうなっていくのだろうか。

(塩野 米松『失われた手仕事の思想』より)

問一 〓線部 a 「センモン」、b 「ジユクセイ」をそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 〓線部 1 「こうした教え方」とはどのようなものですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 師匠が、弟子と同じ現場で働きながら、親切に手取り足取り教えるというもの
- イ 師匠が、仕事の時だけ通ってくる弟子に、要領よく技だけを教えるというもの
- ウ 師匠が、弟子と寝食をともにしながら、仕事そのものを見せて教えるというもの
- エ 師匠が、仕事の時だけ接する弟子に、身をもってねばり強く教えるというもの
- オ 師匠が、弟子と行動をともにしながら、時間をかけて言葉で教えるというもの

問三

X

に当てはまるものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 技の記憶に際して、大脳は非常に大きな役割を果たすということ
- イ 技の記憶に際して、脳の構造を知ることが大切であるということ
- ウ 技を記憶するにあたって、脳には大きな負担がかかるということ
- エ 技は言葉の記憶とはまったく別の部位にたくわえられるということ
- オ 技は言葉の記憶とはまったく同じ部位にたくわえられるということ

問四

A

C

に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア つまり
- イ だから
- ウ たとえば
- エ やはり
- オ まして
- カ ところで

問五

——線部2「技を教わることも難しかったが、人に教えることもまた難しい」とありますが、「教わる」のも「教える」のも難しいのは、「技」がどういうものだからですか。本文中の言葉を使って、四十五字以内で答えなさい。

問六 —— 線部3 「昔からどの職業も、弟子をとった職人は師であっても先生ではない」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「弟子」が修業を通して「師」に教わるのはどのようなことですか。それが述べられている部分を本文中から五十字以内でぬき出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

(2) 「先生」が「生徒」との関係の中で目指すことは何ですか。本文中から二十五字以内でぬき出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問七 —— 線部4 「徒弟制度の中で職人の身に刻みこんだ経験を、ものづくりに際して必要としない時代」とありますが、この時代には「徒弟制度」はどのようなものと考えられていますか。本文中から十字以内でぬき出しなさい。

問八 —— 線部5 「ものづくりの現場から『誇り』が消えていく」とありますが、かつての職人の「誇り」はどういうことから生まれていたのですか。本文中から二十五字以内でぬき出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問九 線部①～⑤の単語の品詞を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア	名詞	イ	代名詞	ウ	動詞	エ	形容詞	オ	形容動詞
カ	副詞	キ	連体詞	ク	接続詞	ケ	感動詞	コ	助動詞
						ケ	感動詞	コ	助動詞
								サ	助詞

問十 本文の内容に合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 徒弟制度の下で育った弟子たちは、師匠の教え方のあまりのうまさに皆、感謝したものであった。
- イ 師匠が弟子に厳しく接する職人の世界を手本にして、学校での教育について見直すべきである。
- ウ 経験に支えられていた手仕事が消えていこうとしている現在、今後の社会のあり方が心配される。
- エ 職人の経験に基づいた判断とふつうの工場労働者の判断では、職人の判断のほうがすぐれている。
- オ 職人は自然との共存をめざしてきたが、現在の機械による生産現場ではそれは不可能である。

【三】次の文章は、安岡章太郎の自伝的小説で、昭和初期の東京が舞台となっています。これを読んで、後の問いに答えなさい。

※
国鉄のS駅のキップ売り場のまわりには、いつ行ってみても大勢の人が何となくぼんやりと立っている。そのくせ、ちっともにぎやかな感じはせず、混雑していればいるほどかえって陰気で、ものさびしい。おまけに僕は、駅ではたらいっている連中が何となく好きになれなかった。特にキップ売り場の駅員は、私鉄の駅と違って、ぶっきらぼうで愛想が悪く、まるで人をイモか何かと間違えているような態度だ。僕は、おそろおそろ一番すみっここの窓口へ行って、教えられた列車の寝台券を買おうとした。

「……………」

そろばんをはじいていた駅員は、窓口の鉄格子ごしに、僕の顔を迷惑そうに見返した。僕は、もう一度、同じことを言った。

「なんまい」と、駅員は投げやりに言った。僕は一瞬ためらった。寝台券を一枚しか買わないということが、非常におろかな、貧乏くさいことのようにも思われた。

「一枚だけでいいんですが」そう答えたあとで、僕はあわてて、つけくわえた。

「下、下の段のやつができたらしいんですが、なければ上でもかまいません」

聞こえているのか、いないのか、駅員は顔を横に向けたまま、古びた手あかだらけの棚からノートを出して何か書きこみ、それからおもむろに青いキップに判を押ししたり、数字を書き入れたりして、

「…円…十銭」

と、僕の出した金と引きかえに、寝台券を突き出した。駅員の態度はともかくとして、やれやれ、と僕は簡単に用が片づいたことに、ひとまずほっとした。そして、受け取った寝台券をたもとにしまいながら、すぐまたそれが、ちゃんとしたものの中におさまっているかどうか気がなった。その瞬間、僕はドキリとした。やわらかいたもとを探った手で、固いボール紙の感触があつて寝台券のあることはたしかめられたが、窓口の台の上に、さつき僕が出した五円札がまた載っていたからだ。いや、それはさつき出した札とは違う、たしかに別の五円札だ。

駅員の頭の真上のあたりに、長いコードがつるされた電灯が緑色のかさをかぶってぶら下がっていた。しかし、石の台の上に置かれた五円札は、あきらかに僕が家を出るとき母から渡されたものと同じでない。駅員は、その紙幣の上に何枚かの五十銭銀貨や十銭五銭の白銅貨を、もの慣れた手つきで重ねていた。

ちやりん、と最後の銅貨が石の台に当たってたてる音が、僕の胸の底まで刺すようにひびいた。僕は心臓の血が全部いっぺんに頭の中にこみ上げてくる気がした。そして台の上の金を手の中に全部にぎりしめるが早いのか、大急ぎで窓口をはなれた。——しめた、駅員のやつ、つり銭を間違えやがった。

僕は、ほとんど夢中で駅前の人ごみの間をすりぬけた。

自分の手の中に、自分の使つていい五円札がある——。あらためて僕が、そんなことをはつきりと考えられるようになったのは、もう高架線のガードが完全に町の建物のかげにかくれて見えなくなつてからだ。それまでの間、僕はただ駅員がつり銭の間違いに気がつき、追いかけてくることだけをおそれた。しかし、もうここまで来れば、その心配はなかった。曲がり角の店で、赤いトンガリ帽をかぶつた甘栗屋の人形が、電気仕掛けで首をふりながら、それと一緒に手に持った鈴を鳴らしていた。

——思いがけないことつて、あるものだな。駅員は僕の出した紙幣を十円札だと思ひこんだ。それで五円のつりに七円何十銭かをよこしてしまった。僕は窓口の石の台の上に、五十銭、十銭、五銭の銀貨、白銅貨が投げ出すように置かれていった有様を、もう一度思いうかべて楽しんだ。僕の想像の中で、次から次へ投げ出された貨幣が山になって、とめどなく積み上げられてゆくように思われた。しかも、その銀貨、白銅貨の山は、どれほど高くなつても、まだそのかたわらに手つかずのままに置かれた五円紙幣にはおよびがたい。こいつは僕が完全に自由に使える金だからだ。

ちやりん、ちやりん……。

甘栗屋の人形の鈴の音は遠くなつた。だがもちろん、ぼくはこの五円で甘栗を買おうなんて気にはなれない。どうせ買ひ物をするなら、ウォーターマンの万年筆か、ゾリンゲンの鹿の角の柄のついたナイフでも買った方がいい。とにかく、今晚はこれで帰ることにしよう。金の使い道はあとでゆつくり考えたらいい。僕は、心ゆたかにそう思い、私鉄の駅の階段をのぼつた。ちやうど電

車が出たばかりで、ホームは空^すいていた。ベンチに赤^{べろ}坊をおぶった女の人がひとりで座っていたが、そのかたわらへ行って腰^{こし}かけようとすると、竹ぼうきとちり取りを持った駅員がやって来たので、僕はベンチから遠のいた。駅員は制服が不恰好に大きすぎ、ダブダブのえりから細い首がのぞいていた。年齢^{れい}は僕より下らしかった……。そのとき、どうしたことか僕の目の前に急に、さっきのS駅の窓口^{まどぐち}にいた駅員の顔がうかんだ。ぶつきらぼうだった横顔の黄色い肌^{はだ}の色が、何だかひどく疲^{つか}れきった感じで思い出され、ふとあの駅員が家に帰ると、病気の母親が待っていきそうに思われた。駅員はだいたい色のうす暗い電灯に、母親がわきの下にはさんだ体温計をかざして見るだろう。いくら注意しながら直してみても体温計は昨晚と同じ目盛りを指しており、疲れたふとんに熱臭^{あつな}いにおいがこもっているのをかきながら、「ああ、おれも疲れた」とつぶやく……。僕は、そんなことをほんの一瞬の間に空想した。そして、い⁴った人入った私鉄の改札口を出ると、まっすぐS駅のほうへ向かった。

S駅のキップ売り場のまわりに、人影^{かげ}はまばらになっていた。僕は窓口^{まどぐち}に近づきながら、さっきの駅員がまだ同じ所に座っているのを見ていた。陰気な鉄格子からのぞきこむと、まだそこに彼^{かれ}はいた。僕は、さっき五円札を出して買った寝台券のつり銭に五円札が入っていたことを話し、ただしそれは売り場をはなれてしばらくたってから気がついたことにして、

「これ、おかえします」

と、紙幣を窓口^{まどぐち}にさし出した。

最初、駅員は何のことかわからなかったらしく、^B「げんそうに僕を見返していたが、やがて、「あれ、そうでしたか?」と、自分のあやまちに気がつくのと、たちまち恥^はずかしそうな、それでいてゆかいそうな笑顔を顔一面にうかべながら、「や、どうもすみません、わざわざ……」と札を言つて五円札を受け取り、紙幣をピンとのばして指先ではじいたついでに、その指で自分のお得意も軽^かくたいたいて、

「陽気のかげんか、ここんところ、おれもどうもイケねえや。ほんとに、すみませんでした」

と、もう一度、僕におじぎをした。——思いがけないといえば、こういう僕の気持ちこそ本当に思いがけないことだったのかも知れない。そんなに札を言われて、はじめは逃^にげ出したい気持ちばかりだったが、S駅のキップ売り場をはなれて、また私鉄の駅の

階段をのぼるころから気分が落ち着いてきたせいか、頭の中がすっきりとして、すがすがしい心持ちになってきた。いつの間にか雨はあがり、僕はホームの真ん中より先の方へ出て、空をあおぎながら胸いっぱい空気を吸いこんだ。肺の中で一つ、

「カーン」

と澄んだ鐘かねの音が聞こえるような感じだった。僕は心の底からわいてくるよろこびに満足した。電車が走り出して、目の下に家々の小さな灯ひがまたたいているのを見ても、この満足感5は新しい形で、よみがえった。

ああよかつたな――。

僕は何よりも、窓口の鉄格子の向こう側に座っていた駅員の横顔が、こつちをふりかえって笑ったとたんに、ひとりのふつうの青年の顔になって感じられたことが、意外でもあったし、うれしい気もした。

このよろこびはむろん、家へ帰り着いても消えずに続いた。

「ただいま」

玄関げんの戸をいきおいよく開けると、僕はたたきに立ったまま、6出むかえた母に寝台券とつり銭を渡しながら、今晚のできごとを話して聞かせた。

「いやあ、そのときの駅員の顔つきったら、なかったよ。こつちも照れくさかったけれど、向こうはそれ以上にすっかり照れて、大口開けてよろこんでやがんのさ」

だが、母は僕の話に向、何の感動もあらわさなかった。のみならず、僕の渡したつり銭と僕の顔とを不思議そうに何度も見比べたあげく、とうとう、

「馬鹿ばかだねえ、おまえは――」と世にも腹立たしげな声で言った。「さつきおまえに渡したのは、あれは十円札なんだよ」

僕は、目のまえで灯が消え、急にあたりが真っ暗くなる気がした。

(安岡 章太郎『幸福』より)

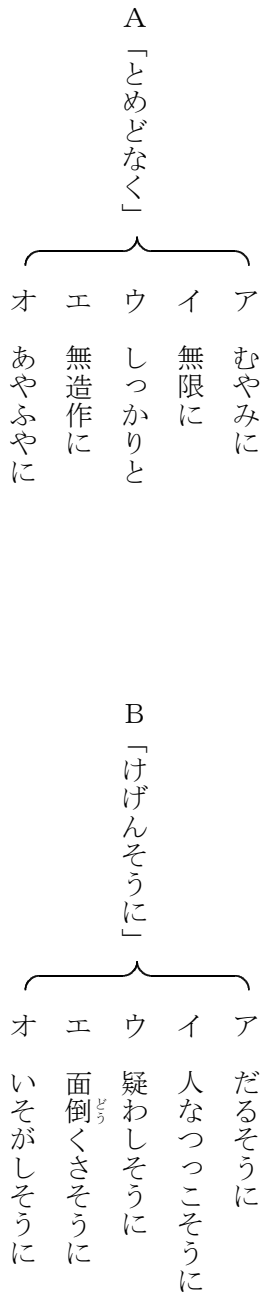
(注) ※国鉄……日本国有鉄道の略。現在のJ Rの前身

※銭……昔のお金の単位。百銭＝一元

※たもと……和服のそでの下方の、ふくろのようになった部分

※たたき……玄関の土間またはコンクリートの部分

問一 線部A「とめどなく」、B「けげんそうに」の意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。



問二 線部からうかがえる「駅員」の様子を、「僕」はどのような態度だと思っ
ていますか。本文中から三十五字以内でぬき出さない。

問三 —— 線部1 「ひとまずほっとした」から、—— 線部2 「僕は、ほとんど夢中で駅前の人ごみの間をすりぬけた」の間の「僕」の心情の変化を次のように表しました。 X Y Z に当てはまるものとして最も適当なものを、後のア～カの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

▼ 「僕」の心情の変化 || 安心 ↓ X ↓ Y ↓ 興奮 ↓ Z

ア 怒り いか イ おどろき ウ 感動 エ 心配 オ 反感 カ よろこび

問四 —— 線部3 「僕は、心ゆたかにそう思い」とありますが、「僕」はなぜ「心ゆたかに」思ったのですか。その理由を二十字以内で説明しなさい。

問五 —— 線部4 「いったん入った私鉄の改札口を出ると、まっすぐS駅のほうへ向かった」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 何のために「S駅のほうへ向かった」のですか。説明しなさい。
- (2) なぜそのようにしようと思ったのですか。説明しなさい。

問六 ——線部5 「ああよかったな——」とありますが、このときの「僕」の気持ちとして適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア たちのまれたキップを無事に買うことができずがすがしい気持ち
- イ 得をすることはなくなったが善いことをした自分に満足する気持ち
- ウ 貧しい者の悲しみを駅員と共有することができて感激する気持ち
- エ 自分の行動のすべてを見守ってくれた美しい夜空に感謝する気持ち
- オ 駅員の親しみやすい一面を見ることができてとてうれしい気持ち
- カ 自分がずるいことをしたのに逆に謝^{あやま}ってもらえてほっとする気持ち

問七 ——線部6 「出むかえた母に寝台券とつり銭を渡しながら、今晚のできごとを話して聞かせた」とありますが、このときの「僕」の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の行いに有^う頂天になっており、よろこび勇んで、事をおおげさに報告している。
- イ 心の底からわきあがったよろこびを母にも知ってもらおうと、事実を率^そ直に報告している。
- ウ 日ごろから厳しい母にほめてもらいたい一心で、起こったことを大急ぎで報告している。
- エ 自分の行いを母がほめてくれることはわかっているの、もったいぶった形で報告している。
- オ 自分の行いに恥^はずかしさを感じており、つつい事実とは違うことを報告している。

問八 この文章についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 駅員や母親との心の交流を、古きよき時代の町の風景とともに少年の視点からたんと描^{えが}いている。
- イ つり銭の間違^{かん}いという小さなことにあわてる純情な少年の姿を、ユーモアたっぷりに描いている。
- ウ 自分の勘違^{かん}いから始まる騒動^{そうどう}を通じて得られた、「僕」の人間的成長の姿をほのぼのと描いている。
- エ 思いこみが強くそそっかしいところのある「僕」の心理を、時間を追っていねいに描いている。
- オ 不器用で自信のない「僕」が母親にほめてもらおうと努力する姿を、主人公の視点から描いている。

【一】(22点)

問一	① エ
	② イ
	③ ア
	④ エ

問二	① 講演	② 逆境	③ 貴重	④ 取捨
	⑤ 納める	⑥ 険しい	⑦ 耕す	

問三	① 垂直	② 原因
----	------	------

【二】(40点)

問一	a 専門	b 熟成
----	------	------

問二	ウ	問三	エ
----	---	----	---

問四	A イ	B ウ	C オ
----	-----	-----	-----

問五	と	技	を	は	見	て	学	び	、	体	で	覚	え	る	も	の	だ	か	ら	。	匠	が	や	つ	て	い	る	こ
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問六	(1)	社	会	の	中	で	、	つ	け	る	こ	と	(2)	言	葉	に	よ	つ	、	さ	せ	る	こ	と
----	-----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	-----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問七	旧	時	代	の	古	ぼ	け	た	遺	産	問八	他	人	が	持	つ	、	て	い	る	こ	と
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問九	① キ	② オ	③ エ	④ イ	⑤ カ
----	-----	-----	-----	-----	-----

問十	ウ
----	---

【三】(38点)

問一	A イ	B ウ
----	-----	-----

問二	違	え	て	い	る	よ	う	な	態	度	ぶ	っ	き	ら	ぼ	う	で	愛	想	が	悪	く	、	ま	る	で	人	を	イ	モ	か	何	か	と	間
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問三	X エ	Y イ	Z カ
----	-----	-----	-----

問四	完	全	に	自	由	に	使	え	る	お	金	を	手	に	入	れ	た	か	ら
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問五	(1)	お	金	を	返	す	た	め																												
	(2)	駅	員	の	生	活	を	想	像	す	と	、	こ	の	ま	ま	お	金	を	持	っ	て	逃	げ	る	の	は	気	の	毒	に	思	っ	た	か	ら

問六	イ	オ
----	---	---

問七	ア
----	---

問八	エ
----	---

受験番号

次の文章を読んで、テレビについてあなたが考えたことを六百字以内で述べなさい。

わたしはテレビがすき

だってつまらないときにテレビをみると

なぜかだんだんおかしくなって

たのしくさせてくれるからだ

なんだかはなしあいてにおもえる

テレビだけが話をしてくれる

これは、小学校四年の女の子の詩である。

テレビをみているとテレビの前からはなれられなくなる

テレビをみたくなくてもみてしまう

テレビをみちゃだめといっても二階でみる

ぼくはテレビがどうして好きかわからない

これは小学校六年の男の子の詩だ(以上、佐藤毅『テレビとわたしたち』岩崎書店)。

小学生たちは素直だ。自分の気持ちをそのままに述べている。「テレビをみたくなくてもみてしまう」のはな

ぜだろう。この男の子にはわからない。だから「ぼくはテレビがどうして好きかわからない」と正直に言っている。よくはわからないのだが、テレビが好きなのだ。その気持ちを占めている大きな理由は女の子が言うように

、「なんだかはなしあいてにおもえる」ことであり、いまだき誰にとつてもまともに「話をしてくれる」のは、テレビだけになっているからだろう。

人は本来、他の人と自由に話をしたい、言葉を用いて自分と相手が思っていることをたがいに伝え合いたい、この気持ちがないへん強い動物なのではないだろうか。子どもたちの詩からも、他の人と伝え合う＝コミュニケーションをしたいんだという気持ちが切々と聞こえてくる。「人は言葉を操る動物」と言われる。私たちの祖先

はこの精緻にしてやっかいな言葉というものを作り上げ、しかも長い年月をかけて営々とみがきあげてきた。

ところが、どこでどう風向きが変わったのか、言葉という高度なコミュニケーションの手段をもっているのに、それを十分に、いやそれどころかいくぶんかでも使える状況が急速に狭まってきている。家庭で話し合おうとしても、学校で話し合おうとしてもあるいは放課後に思う存分気持ちを伝え合おうとしても、みんな同じ、相手いなければ状況もない。私たちは友だちをいつ、どこで、どう見失ってしまったのか、大人も子どももひとりぼっちになっている。

そのばらばらになった私たちをともかくも救ってくれるのが、テレビ君である。詩をつくった子どもたちもテレビ君を頼り、すがりついている。

もちろん、なま身の友だちとふれ合うチャンスが訪れることもある。だが、その機が深まることはほとんどない。みんながとにかく忙しいしすぎるのだ。忙しい忙しいという気持ちが先に立っている。時間がない理由には、テレビを見ることが大きく作用しているのだが、私たちはそれを言いわけにはしない。一日に何時間もテレビを見ることがこの忙しさと無関係なはずがない。何もすることがない、なんとなくつまらないときに見るテレビが、家族や友だちとのコミュニケーションを断って見るテレビになってはそれこそ本末転倒なのだが、私たちの日々の生活を考えると、笑うことはできない。

二つ目の詩の注目すべきところは、「みちやだめといつても二階でみる」ことだ。一階の居間でごろごろしているのは目立ちすぎる。テレビばかり見ていないで勉強しなさい、と叱られれば「はい」と返事はいい。しかし、一階がだめなら二階がある。二階の自分の部屋ならばプライバシーの保護だって十分である。自分の家がうるさければ友だちの家がある。

「どうして好きかわからない」と言わせる強引な力にこそテレビの真骨頂があるのだ。テレビのこの強引な力を明らかにするために、要素要素に分解してみよう。きっと何かが見えてくるだろう。

